
精神科医はへき地医療で “使いもの”になるのか？

私の転職奮闘記

香山リカ著

星和書店、四六判208頁、1,980円、2024年7月刊

(オフィス朔) 平島奈津子

休日の朝、本書を読み始めた。途中で、たまった家事を片付けたりしながら読み進めて、夕刻には読み終えていた。それほど、手練れの文章は読みやすかったが、何度か、著者の思いの深さに接してページを繰る手が止まった。

本書の著者は、(学生時代から)長年、「香山リカ」という筆名で文筆活動を続け、マスコミへの露出も多い精神科医である。いや、本書によれば、本人は「2022年(61歳時)から総合診療内科医として、へき地の診療所に転職して、精神科医は辞めた」という。

「全科共通」の医師免許を手にしても、専門領域以外の診療医に「転職する」のは簡単なことではない。著者は2016年頃から相応の準備をしていたようだが、それでも実地臨床は甘くなかったという「奮闘記」が本書である。

その目次の小見出しをいくつか書き出してみると、「先延ばしはいけません」「やらなすぎもダメ、でもやりすぎもダメ」「パレスチナに胸を痛めながら整形外科医に教えを乞う」「“なんかありそう”の先で混乱するんです」「医師・朝比奈秋さんの小説にハマる」「へき地に住む移住者たち」などである。

最後の章は「へき地医療に必要なこと、へき地だからできること」と題して、改めて「全人的医療」の実現について思いを馳せるとともに、その土地を襲った天災(大地震)だけではなく、その土地の初老の女性たちがその時代の「当たり前」として受けてきた「理不尽」な人災(逆境)についても触れ、それらを受けとめる彼女たちについての、著者の思いや惑いが描かれている。

本書を通読して、書評子には、著者が今もなお「ジャーナリスティックな視座をもつ精神科医」であり続けているように感じられた。そもそも、本書のタイトルの主語は「精神科医」ではないか。だか

からこそ、著者は、プライマリケア医として熟練することに加えて、「プライマリケアとしての精神医療」を超えたい自分と折り合いをつけることにも苦勞しているのだろう。

最後に、書評子が本書で一番好きなエピソードのさわりを紹介して、筆をおきたい。

それは、かかりつけの90代女性患者に重篤な貧血が見つかったところから始まる。遠く離れた総合病院の血液内科で精査することを勧める著者に、患者は「もういいよ。ここで診てよ」と応じる。諦めきれない著者が娘さんと呼んで説得すると、患者は「先生、私を生かす気だね。生かしたいんだね？」

と問い、肯定する著者にニヤリと笑う。かくして患者は総合病院を受診するが、その後、現れた患者は「検査は断った。向こうでもらった薬は飲んでいない。こっちでもらった薬は飲んでいる」と言う。専門医からの詳細な診療情報提供書には「考えられる診断名と著者の診療所でできること」が助言と共に書かれていた。

この患者は新米プライマリケア医である著者より一枚上手^{うわて}のようだが、それでも、書評子にはこの患者が著者の熱意によって「生かされた」ように感じられた。

■お知らせ

SST 普及協会設立 30 周年記念事業 本大会

日程：2025 年 7 月 5 日（土）・7 月 6 日（日）

会場：帝京平成大学 池袋キャンパス

総会テーマ：人とつながるソーシャルスキル—SST で温かい社会を創ろう！

参加費：事前登録参加 会員 10,000 円 非会員 10,000 円 家族 2,000 円 学生・当時者 2,000 円

当日参加 会員 12,000 円 非会員 12,000 円

※参加申し込みや詳しい案内は本大会ウェブサイト (<https://30th-kinen.jasst.net/>) をご覧ください。

問い合わせ先：〒104-0045 東京都中央区築地 2-3-4-9F 杜陵印刷株式会社内

SST 普及協会創立 30 周年記念事業 本大会運営事務局

E-mail：30th-kinen@jasst.net